

# みっしょん通信

- 宣教協議会参加者による振り返り -

2024年6月発行 No.6

横浜教区宣教委員会ニュースレター「みっしょん通信」第6号をお届けいたします。今回は、2023年11月に清里で開催された「2023年 日本聖公会宣教協議会」の出来事を一人でも多くの信徒の方にお伝えするべく、参加者による「声」を集め掲載することにしました。日本聖公会の11の教区の信徒・聖職が集い、これからの日本聖公会の歩みについて考えた4日間の出来事をご紹介します。今回の執筆はこの宣教協議会で実行委員長を務められた磯晴久主教さま（大阪教区主教）をはじめ、入江修主教さまを含む参加者の皆さんに原稿執筆をいただきました。ぜひお読みいただきたく思います。

横浜教区宣教主事  
司祭 パウロ 窪田真人

横浜教区の兄弟姉妹の皆様へ

「聴くこと→祈ること→そして、奉仕活動・宣教・伝道の業へ」

実行委員長 主教 アンデレ 磯 晴久（大阪教区主教）

2023年11月10～13日清里・清泉寮を会場に、日本聖公会宣教協議会が開催されました。神さまと、皆様に心から感謝申し上げます。前回2012年と同じ「いのち、尊厳、かぎりないもの」と言う大きなテーマのもと、そこに「一となりびととなるために一」という副題をつけて、すべての教区から実行委員、全主教、管区の諸委員含め約145名の参加者が集っていただきました。

実行委員会では、宣教協議会は清里・清泉寮での開催期間だけではなく、準備に入りました3年前から、宣教協議会は始まっていると捉え、そして宣教協議会後も続くと考えて参りました。まず、皆様からアンケートを取り、またぶどうの枝分科会と称して、日本聖公会に関係するできるだけ多くの方々のお話を「聴く」ということ、「お互いに聴き合い、語り合

う」ということを大切に進めて参りました。今後も宣教協議会は続いていきます。このように、横浜教区で宣教協議会を受けて、教区としての取り組みを開始して下さり、実行委員長として大変うれしく感じております。

<まず、聴くことから>

宣教協議会の前半は、しっかり耳を傾けるプログラムでした。1日目は各教区に実り持ち寄りブースを用意



して頂き、各教区の10年の歩みを語って頂き、私たちは耳を傾けました。続いてリモート配信や録画によって、3つの小さな教会に聴く(沖縄教区屋我地聖ルカ教会、九州教区対馬にある巖原聖ヨハネ教会、東北教区大館聖パウロ教会の皆さま)時間を持ちました。とてもいい時間でした。

たとえば、秋田の大館の教会、幼稚園があるのですが、幼稚園のこと、子どもたちのことを大切に祈っておられること、東京教区の聖マーガレット教会と繋がっておられることは大変心に残りました。大きな教会と小さな教会がよき交流をしておられる姿が印象的でした。

2日目には、「いのちの現場から聴く」というテーマの下、5人の方からお話を伺いました。「保育園 こどもたちのかかわりを通して、神さまが語っておられること」、「チャプレンと言う立場から臨床の現場で寄り添うこと(英国での第2次世界大戦中、日本の捕虜となったイギリス人元兵士の方々との和解の経験)」、「ホームレス支援活動から 貧困問題」、「性の多様性」、「カルト問題 カルトは呪いをかける。教会は祝福する。キリスト教会は健全な宗教とは何かをもっと明らかにしていく必要があること。」など貴重なお話を聴く機会となりました。

### <聴くことから祈りへ>

さて「聴くこと」は、見つめること、深く知ること、心で感じることに、考え自分なりの言葉にしていくこと、互いの思いを分かち合うこと(グループシェアリング・バイブルシェアリング)となり、そして、神さまへの祈りとなって行きました。特に、青年たちによる「分かち合いの礼拝」は心に響く礼拝でした。今世界を覆っている暗闇を見つめ、私は心が震える経験をしました。そこから、テゼの賛美を歌いながら、祈りながら、み言葉に聴きながら、希望へと導かれました。

### <聴くことから祈りへ、そして奉仕活動・宣教・伝道の業へ — 主イエスに従う道>

宣教協議会は、主教たちからのメッセージ、宣教協働区アワーへと進み、まとめへと入って行きました。宣教協議会の提言「(仮称)清里コール」を出す予定でしたが、残念ながら最終日にまとめることができませんでした。皆様からの意見・提案が大変多く、多岐に及んでいたからです。(今、お手元に届いている「宣教協議会からのよびかけ」を是非ご覧ください。)

最終日の意見交換でも様々な発言がありました。その中で、私が一番印象に残った発言は、歴史をしっかりと振り返ることと具体的な奉仕活動・行動や実践を求めるものでした。それは、今後の管区や教区、教会、そして私たちの課題になりますが、私は、宣教協議会を通して、特に、「聴くこと」が「神さまへの祈り」となり、そして「神さまへの祈り」が、私たちの「奉仕・行動・実践」につながっていくことの大切さを教えられました。そのことは、世界と人々のことをよく見つめ、知り、声なき声を聴かれ、慈しみの心をもって祈り、深く神さまとつながる祈りの場から、実践・行動へ向かった主イエスに従うことでした。

私は、宣教協議会から数か月がたった今、「聴くこと」から「神さまへの祈り」そして、「主イエスと共に歩むわたしたちの奉仕活動・宣教・伝道の業へ」、この流れを大切に歩みたいと考えています。

横浜教区でどのような歩みが始まるか、大変楽しみにしております。主の導きを祈りつつ。



## 「喜びの<sup>たすき</sup>襷をつないで」

横浜教区主教 イグナシオ 入江 修

2023年11月に開かれた日本聖公会の宣教協議会は、その中身が盛りだくさんで多岐に亙り、私には、一つひとつのプログラムに関しては正直、消化不良気味のところもありました。しかし、それは言い換えれば、教会が取り組もうとしている課題がそれだけたくさんあるということを示しているともいえます。

協議会の後、コールコミッティから出された、「ここから歩き始めよう



～いのちに仕え、となりびととなるために～」という呼びかけは、その多岐に亙るものの根底に流れる通奏低音のようなものです。

そうであるとすれば、私たち自身をそこに押し出していくもの、それは、主イエス・キリストのご復活の命に生かされている者の“喜び”です。その喜びの内にある人たちに対して、テサロニケの信徒への手紙一の第5章16節は、次のように語っています。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことでも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」(新共同訳)と。

それは、いついかなる時であっても神さまのみ前に常に喜び、祈り、そして感謝をささげなさい、ということです。喜んでいるとは、キリストの福音に生きているということで、自らの内に喜びがなければ、私たちは自らが喜びの知らせである福音を宣べ伝えることはできません。神さまのみ前に常に喜んでいる自分があるからこそ、私たちは、福音を福音、つまり喜びの知らせとして伝えていくことができるのです。

私たちは、嬉しいことがあると決して黙っていることはできません。自ら進んで、自ずと伝えたくなるのです。命が大切にされているところ、それは限られた人だけが喜び、他の人たちが我慢を強いられているようなところではなく、皆が互いに命の喜びに満たされているところなのです。

私は、クリスマスの場面で幼な子のイエスさまが家畜小屋の飼い葉桶にスヤスヤと眠っておられるところを思い出します。人の住むところから弾き出され、薄暗く、動物の臭いがするところですが、マリアとヨセフに見守られ眠っておられるイエスさまは、そのお姿を目にするすべての人に命の喜びと平和を与えておられます。野宿していた羊飼いたちもそこを訪ね出し、その喜びに満たされます。

神のみ子としておいでになったイエスさまがスヤスヤと眠っておられるのは、最も弱く、小さく、そして貧しい中にあるのですが、そこには命の喜びが満ち満ちています。人の世の最も弱く小さく貧しい中、しかし、そこに神さまによって確かに守られている命があり、一粒の水滴が水面に落ちてその輪が全方向に無限に広がってゆくように、そこに満ちているみ子の命の喜びは全世界へと広がってゆくのです。

私たちは、いついかなる時であろうと、神さまのみ前に喜びと祈りとそして感謝をもって、イエスさまがもたらされた命の喜びの<sup>たすき</sup>襷を受け、それを繋いでゆく者として歩み続けたいと思います。

## 「清里にて」

横浜教区司祭 サムエル 小林祐二  
(清里聖アンデレ教会牧師、教区ホームページ委員長、  
管区沖縄 PJ)

清里ではこの 2023 年日本聖公会宣教協議会以前にも、1995 年 8 月の宣教協議会、1980 年 4 月の第 2 次宣教協働協議会、他にも全国規模の教役者会等も開かれてきました。また横浜教区の大家族キャンプは毎回清里で開催され、各地域での合同キャンプや青少年関連のキャンプなど、交わりと修養の場としてこの地が選ばれてきました。この経緯から、この度も宣教協議会が清里で開催されたことは、現任の牧師として、また折々に清里を訪れてきた者としてもうれしいことでした。



参加者の皆さんには休憩時間や地産地消の食事、メイン会場の窓からの展望を通じて清里らしさに触れていただくことができたかと思います。しかし少し批判的に振り返ると、会期中に清里の歴史や培われてきた靈性にどれだけ触れることができたでしょうか…という残念さがあります。

語り、聴くことはとても大切なことです。しかし、神様のみ声は一見無駄と思われるような余白の中にさえ響きますし、聴いた言葉に答えるためには黙する過程も必要です。そこまでをプログラムに盛り込むのは困難だったのかもしれませんが、そうであればこそ、日本聖公会の宣教における協議は会期後のたった今も継続しているという自覚が必要で、参加者の一人として、与えられた任の重みを感じています。

清里には「念場(ヶ原)」という地域があります。未開の地でしたが、地域の方言で「きたれ者」と呼ばれる入植者や移住者によって拓かれ、今の清里地域を構成するに至ります。地名の由来までは分かりませんが、最初の入植者たちは先祖の墓石まで持参したそうで、彼らにとっては念場が”正念場”だったのだと気づかされます。わたしたちの生活の場も、キリストの教えを宣べる正念場です。その意味でまだまだ「きたれ者」かもしれませんが、「宣教協議会からの呼びかけ」を足がかりに、まずは日々を正念場として過ごせているかを顧みたいと思います。

---

## 「私にとっての弟子であること」

横浜教区司祭 パウロ 窪田真人  
(横浜教区宣教主事)

2023 日本聖公会宣教協議会は間違いなく、日本聖公会の歴史にその存在を刻むことでしょう。振り返ると、22 時までには及んだ多岐にわたる多様な価値観を含んだプログラムは、教会が隔絶された社会の中で生き存在している立場ではなく、社会の一員として向き合わざるを得ない現状を示していると言えます。そういった社会の変革期に行われた初めての宣教協議会であったと言えるでしょう。特筆すべきは、プログラムの中で、「私たちのあゆみ～物語を聴く」と題して、宣教の現場における神のみ業に参加する働きに耳を傾ける時間を持ちました。「聴く」ということをそのまま表現した素晴らしい試みであったと言えます。

一方で、この宣教協議会がどこで開催されたのか、と言うことは誤解を恐れず言えば指摘せざるを得ません。開催地における宣教の業、歴史、試み、空気、先達者への敬意と言う言葉に言い換えることができるかもしれませんが、清里聖アンデレ教会やキープ協会、またポールラッシュ博士を味わうことにも「耳」を傾けて「聴きたい」ところでした。

さて、宣教協議会が昨年 11 月に終わって以来、幸いにもずっとこの宣教協議会のことを考え続けています。「2023 年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」から「イエスの弟子となる」をテーマに私に与えられている賜物とは何か、を問い続けています。多様な価値観に触れることもその一つであると思いますが、教会や地域の人たちを想って一生懸命に祈ることを改めて牧会の中心に据え、実行していくことを強く認識した宣教協議会でありました。

私にとってはこの宣教協議会は決してまだ過去の出来事ではなく、現在進行形でこの協議会は継続中です。参加者の一人として、そして「となりびと」としてともに歩むために、多くの人の心に本宣教協議会の理念が留められ続けることを願っています。

---

## 2023年日本聖公会 宣教協議会からの呼びかけ

イサク 岩井譲治

(常置委員・逗子聖ペテロ教会)

昨年11月に清里清泉寮で開催された、これからの日本聖公会の宣教のあり方を話し合う宣教協議会に参加いたしました。

前回の宣教協議会から今回までの横浜教区の実績を、「10年の実り」として8人の教区出席者が事前に話し合いでまとめ、宣教協議会冒頭で発表致しました。

協議会では、「集まり、交わり、聴きあい、語り合い互いに学ぶ」機会を与えられたことに感謝いたします。特に小さな教会の信徒が賢明に教会を守る姿に、又、「となりびと」として寄り添い、いのちの現場や地域の教会で働く人たちの声に感銘を受けました。

それを踏まえてのグループシェアリングでは、異なる地域の異なる立場の人たちと話し合いを持ちましたが、横浜教区の実りの中で、「信仰継承の重要性についての対応」「祈りのしおりの発行」「チャプレンの務めと諸施設の宣教的位置づけ」が重要だとの思いを持ちつつ、その取り組みを踏まえ話し合いに参加し有意義な話し合いができました。

この協議会で語られた多くのことをもとに、参加した全員がかかわったものとして、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」が発出されました。

宣教協議会に参加した我々は、教区内各地域の宣教懇談会にお邪魔して、宣教・伝道活動に繋がっていく、御心にかなう活動を展開するには具体的に何ができるのかを考えるにあたり、従来の教区での活動を踏まえ、活動の指針となる宣教協議会の「呼びかけ」について共有させていただくことが重要であると考えております。

2022年開催のランベス会議は、「神のための神の教会—ともに歩み、聴き、証しする」というテーマのもとに、「ランベス・コール」が表明されました。

心にとめた一言は信徒に発せられたコール(よびかけ・要望)で、「すべてのキリスト者は、イエス・キリストの証人であるようにとの招きを、喜びをもって受け入れ、自身の証を通して、少なくとも1年に一人が信仰にいたり、弟子として成長するよう祈る」というものです。

---

## 「宣教協議会に参加して」

アイリーン 青木亜矢

(教区婦人会・藤沢聖マルコ教会)

2023年11月、晩秋の清里で開催された「日本聖公会宣教協議会」への参加の機会を頂きました。準備段階で届いた資料など、また過密とも思えるプログラムには実行委員の方々の熱を感じると同時に「果たしてついて行かれるだろうか？」との不安もありました。

初日 11 教区による「みのり持ち寄りブース」では各教区のカラーの違い（地域性から来るものでしょうか？）を感じ、これからの四日間を楽しみに思ったことを覚えています。

「物語を聴く」では、小さな教会で信徒の減少に向き合いながらも豊かな信仰生活を送っておられる様子が伝わってきました。翌日の「いのちの現場から聴く」その後の分科会では「カルトについて」を選択し主に統一教会問題についてお話を聴きました。現在「多様性」「ジェンダー」「カルト」という言葉は報道などで多くの方が耳にしたことがあると思います。今回の協議会では「セーフ・チャーチ」も加わり、参加者が理解を深める場としているのだと思います。

「となりびととなるために」私たちに何ができるのか？何が必要なのか？と問うテーマでプログラムは進んで行きましたが、内容をしっかり落とし込む時間が足りないというのがグループシェアリングを共にした方々の声でした。

教会に限らずコミュニティというのは内向きになりがちです。ですから意識して外へ向かう気持ちが必要です。そこで大切なのは「神様に愛され見守られている」という確信ではないでしょうか。そしてもう一つ大切に思うのは「鈴と、小鳥と、それから私 みんなちがって、みんないい」（金子みすゞ・私と小鳥と鈴と）。日曜学校での子ども達との時間、この二つを心に置いて過ごしています。

主に感謝いたします。



## 「2023 年宣教協議会に参加して」

セシリヤ 宮崎眞琴  
（教区幼保委員・市川聖マリヤ教会  
市川聖マリヤ幼稚園園長）

横浜教区幼保委員として、宣教協議会に初めて参加させていただきました。日本聖公会各教区の信徒の方々や、そこに繋がる関連施設の方々とお話ができることに期待を持ちつつ、保育の現場で行われている宣教について、また私自身が神さまに求められている働きは何か…という思いで臨みました。宣教協議会の大きなテーマでもある「聴くこと」「耳を傾けること」のプログラムで 3 つの教会信徒のストーリーを伺いました。礼拝が司祭だけではなく信徒ひとりひとりの信仰と働きによって守られ、祈り求める姿は教会の大きい小さいは関係なく同じなのだと思います。そのストーリーを身近に感じ、応援し祈りたくなる、応答したくなる気持ちに、会場が包まれていきました。「語る」ことはなんと力強いことでしょうか。その後、グループシェアリングでは身近な事象から広がっていき、それぞれの立場の違いを超えて、協議会全体を通して本当に多くの話に広がっていきました。実行委員会とコールコミッティーの方々が纏めた「宣教協議会からの呼びかけ」と「小解説」を是非お読みいただければと思います。

清里から戻り、数カ月経ちましたが私の中では宣教協議会が未だ続いており、参加者はそれぞれの場所（立場）で、賜物を活かし歩いていきなさいと問われているのだと思っています。横浜教区内の幼保こども園は、皆さまの祈りによって支えられています。それぞれの園に集う子どもたちの心にキリストの種が撒かれるように願い、教会と施設が手を携えて地域に向けても間口を広げていきたいと思っています。

## 「わたしたちの責任」

ユニケ 波田祈里恵

(教区青少年担当者・沼津聖ヨハネ教会)



2023年11月10～13日、日本聖公会宣教協議会が行われ、私はその中の11日と12日のプログラムに参加させて頂きました。

神様そして参加の機会をくださった方、関わった全ての方にまずは心から感謝申し上げます。前回大会はまだ12歳だった私、お恥ずかしながら宣教協議会というものが存在することすら全く知らずに今回の大会に参加しました。

ですが、若い視点で日本聖公会の現状について様々な方から「聴く」、自分の立場で「発言する」ことを積極的に取り組むいい理由になったのではないかと感じています。

ここでは印象に残った2つの出来事についてお話します。

### ・カルト宗教から見る聖公会のあり方

11日に行われた「いのちの現場から聴く」プログラムで、私は統一教会を脱退したかたからのお話を聞き、その分科会に参加しました。いわゆる「カルト」と呼ばれる宗教とはなにかを掘り下げていくと、聖公会も似たような危うさを孕んでいる可能性があるということが分かってきます。まずは自分たちがどのような組織であるかを理解すること、多様化する社会や文化に対して広い視野や寛容な姿勢を持つこと、そして今まで以上に積極的に働きかけつつ周りに寄り添うことが大切だと考えさせられました。

### ・私たちの責任とは？

12日のプログラムでは主に新たな呼び掛け作成に向けたグループシェアリングを行いました。各グループの発表の中で印象に残った単語があります。これはニュアンスですが「この現状は私たちが放棄してきた責任によるもの」という主張です。まさに喉から手が出るほど欲しかった言葉。責任という単語を使うと少し重苦しいですが、その程度の意識を持たなければならないところまで来ているということです。次世代を担う若者として、自分がどういう存在であるかを再認識し、「となりびと」として一人一人が意識していく必要性を考えさせられる貴重な言葉でした。

最後に、皆さんが豊かな日々を過ごせるよう願っております。ありがとうございました。

## 「青年の呼びかけ」

アントニオ 片山修

(教区青少年担当者・林間聖バルナバ教会)

宣教協議会の3日目まででしたが、私は参加できてよかったと感じました。しかし、私たちが話したことは、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」に全て反映されたわけではありませんでした。非常に残念なことではありますが、形として残ることが全てでしょうか。実際にグループシェアリングの意見であったり、さまざまな問題に取り組む方々が招かれて話したということなどが記憶として残り、教会へ持ち帰ることができたのではないのでしょうか。宣教協議会で過ごした日々は確実に我々の信仰生活の中で大きな原動力になったと思います。それは、神様からのお恵みと一緒にだとも思いました。今回、私は青年として参加し、他の教区の方々とお話しして、今青年が少ない現状に、より危機感を感じました。また、今回の完成した呼びかけに自分たち青年に関することが明確にないこ



とも非常に残念に思います。しかし、書いてないからと言って やらない理由にはなりません。今私にできることは、青年の声に耳を傾け、青少年担当の方々にその声を伝える。伝わらなければより大きな声で主張していく。そして伝えるだけでなく、皆さんの声も聴き、そして青年の活動に組み込んでいく。そのような形で合致する点を探していきたいと思います。

この考えは、全国青年大会で、笹森主教様から祈祷書改正についてお話を伺ったときに教わった考えを元に、自分なりにできることを言葉にしました。また、熱い気持ちが入江主教様に伝わり、4 月から青少年担当者となることができました。社会人になって忙しく、なかなか注力できる機会は減りましたが、少しずつ実現していきたいと思います。おそらくこれから誰よりも長く向き合わなければならない自分たちが、支えていかなければならないという気持ちでこれからも歩んでいきます。

---

## 「スチュワードの立場から」

横浜教区聖職候補生 染谷孝章

今年の2月2日付でこの会議に基づいた「呼びかけ」がまとめられました。また3月31日復活日には「呼びかけ」に関する小解説がまとめられています。2012年に開かれた宣教協議会がまとめられた文書を出身教会の棚で見つけたとき、当時私は信徒として教会の宣教委員会に属していたものの、二つの「宣教」を結び付けられていなかったことを思い起こします。

今回はスチュワードとして事前にプログラムの説明をリモート会議で数回受け、実行委員会の聖職、信徒の方々による入念な準備により礼拝と聖餐式を中心に組まれていたことを知りました。各役割分担を決め、会期の前日から清里に向かい、他のスチュワードメンバーと共に陪席、参加させていただくことができました。

数十年間教会生活を送ってきた中でいろいろな機会に知り合った方達と久しぶりにお会いでき、初めてお会いした方々ともディスカッションや懇親の場でじっくりお話することができました。信仰生活を共にしている仲間が全国にいてつながっていることに励ましと希望が得られました。

「小解説」の中で「『いのちに仕え』は前協議会を踏襲したもので、この世界の一つ一つのいのちに向かい合い仕えることを志すものです。」とある一文を読んで思い出したことがあります。既に天に召されたある司祭さんが、もう教会生活から離れると言った信徒さんに、「神様はしぶといぞ。いつまでも追っかけていくぞ。」と仰ったという話です。

「呼びかけ」は主からの呼びかけであり私たちは逃げられないことを改めて確認しながら、今遣わされている地であって、主の導きのうちに愚直にこの「呼びかけ」にお応えするよう務めてまいりたいと思います。

---

## -編集後記-

最後までお読みくださりありがとうございました。次の宣教協議会を見据えて、歩みは遅くとも私たちの横浜教区にしっかりと2023年日本聖公会宣教協議会の呼びかけを根づかせ次世代への信仰継承の礎としていきたいと思えます。楽しい有意義でしっかりと考えることができた10年間であったと未来の私たちが口にできるようしっかりとこの経験を伝えて参りたいと考えています。(Pauls)

